



# こうげわくわく子ども探険隊Ⅲ

わくわく子ども探険隊とは？

21世紀を担う子どもたちが、町の自然や歴史文化、産業、福祉など、さまざまな分野で活躍する地域の人たちと出会い、ふれあうことで、町の魅力や課題を考える機会を作り出す体験学習プログラムです。町と社会福祉協議会が主催し、今年で3回目の開催となります。町内の各小学校から31名の子どもたちが参加しました。

探険隊には、さまざまな地域で活躍しているおじさんやおばさんが、子どもたちの先生として登場します。今回は、地域づくり協議会から、よらんかい、友枝新聞発行し隊、アグリマンの皆さんに、「協力をいただきました。上毛町という広大なフィールドで、子どもたちは、普段学校では学ぶことのできない体験を通じて、楽しみながら学んでいきました。」

## 探険隊Ⅲの任務

子どもたちに与えられた任務は、農家体験、防災学習、子ども記者の3本。テーマに沿って、子どもたちは、4日間でさまざまな体験をしました。そして、これら体験を通じて学んだことや感じたことから「じぶんたちにできること」を探してくださいと、指令を出しました。

# 体験してみよう

探険隊Ⅲのメインテーマは、町の基幹作業である農業。第一線で活躍する農家の方が先生となり、子どもたちは、収穫から出荷販売までの一連の作業を体験しました。また、防災まち歩きで山国川を訪れ、東日本大震災被災地に向けて「今じぶんたちにできること」を考えるきっかけづくりを行いました。

2 日

## 防災について学ぼう②

8月9日(火)、「ハザードマップ」を片手に、山国川に行きました。見学したのは、原井にある蔵尾井堰。ハザードマップによると、「この辺りは「重要水防箇所」に指定されていて、大雨が降ったときに浸水するおそれがある場所だ」ということが分かります。実際に、平成5年と平成19年に水害が発生し、現在、その対策として堤防が築かれています。現地で説明していただいたのは、山国川河川事務所の野原先生。前回の川の氾濫で2mの高さまで浸水したことや、わずか30cmの浸水で身動きが取れなくなることなどを教えてくれました。そして災害発生時の無線放送を聞いたときは「ここにかくすぐ逃げるのが大切ですよ」と、繰り返し強調していました。

## ロープの結束指導

ロープは、もしものときの強い味方。続いて、ふれあいの家京築に移動し、ロープの使い方について学びました。先生は、地域づくり団体「よらんかい」の山下朗さん(東下)です。「ロープの結び方を覚えておけば、災害などの、『もしものとき』に役立ちます」と教えてくれました。

この日のレクチャーは、「巻き結び」「玉結び」「もやい結び」の3つでした。これらの結び方は、基本中の基本。しかし、子どもたちは、山下先生の素早いロープ捌きについていけず「手品みたい」と呆気にとられていました。個別指導を受けて、何とか結べるようになった子どもたちは、夢中になって、何度も解いては、結びなおしていました。

1 日

# 知ってみよう

普段、何気なく生活していると、身近なことでも、意外と知らないことが多いものです。子どもたちと一緒に町の自慢を探したり、防災学習や子ども記者講座など、座学を中心に活動しました。

## アイスブレイク

子どもたちの緊張をほぐす。7月25日(月)探険隊初日、げんきの杜に集合しました。初めて顔を合わせた子どもたちの表情はちょっと硬いようです。まずは、そんな子どもたちの緊張がほぐれるように、中津レクリエーション協会の葉丸まゆみさん(上唐原)が先生となって、ストロー飛ばしやじゃんけんゲームなどのレクリエーションを楽しみました。次に、すっかり探険隊の定番となったアキュラシーをしました。アキュラシーは、フライングディスクと呼ばれる円盤を投げて目標の輪を通り過ぎせる競技です。今回も身体障害者福祉会の皆さんと一緒にチームを作り、力を合わせて頑張りました。

## 町の紹介

「誇りある地域「こうげまち」」。上毛町ってどんなまち？「みなさんはどう思いますか？」そんな投げかけをしながら、観光ガイドブック「上毛の宝」とスライドを使用して、子どもたちと一緒に町の自慢について考えてみました。

また、町の基幹産業である農業をテーマに「食糧自給率って知っていますか？」「荒れた農地があります。どうしたらいいですか？」など、質問形式で、町の農業について考えてみました。

## 防災について学ぼう①

東日本大震災の復興支援として、現地に派遣された森口主事(住民課)が、実際に歩いた被災地の様子や、子どもたちに説明しました。次々にスライドに映し出される被災地の惨状。大津波で大破した建物や、瓦礫が小学校に山積みされている現実を目の当たりにした子どもたちは、不安そうにじつと映像を見つめていました。

## 農家体験①

東山茶園(下唐原)の見学をしました。先生は、地域づくり団体「アグリマン」の宮崎昌宗さん(土佐井)です。子どもたちは、ツバキ科である茶の葉からは、お馴染みの緑茶だけでなく、ウーロン茶や紅茶なども作ることもできますが、国内では、全体の約9割が緑茶になっていることを知りました。「なぜ、お茶畑は上部が丸い形をしているのですか？」「東山茶園はいつでもですか？」などの質問に、先生は「いい質問ですね。東山茶園は、戦後すぐに造成されました。当時は手摘みだったので、今は専用の機械で刈り取っていて、その機械を通った後は、どこも同じ丸い形になるのです」と丁寧に答えてくれました。

それから、工場内に移動し、刈り取った茶葉を緑茶にする工程を学びました。葉を蒸した後、乾燥させながら丹念に揉んでいきます。さらに乾燥させて、形を整えたものが商品となって市場に出していきます。このとき福岡県内の緑茶は全て「八女茶」として扱われるそうです。上毛茶としてPRするためには、何か良い方法は無いのでしょうか。先生は、現在、上毛町産の茶葉で紅茶を作り、上毛茶ブランドの開発とPRに取り組んでいるそうです。

新茶の採れる時期にしか工場は稼働していないため、実演はありませんでしたが、蒸し暑い中、子どもたちは熱心に説明を聞いていました。

## 郷土料理づくり

ふれあいの家京築に入館後、よらんかいの皆さんと食育担当の福本主任事務教務課が先生となって、町の郷土料理のひとつ「にぐい」を作りました。にぐいといえば、ニンジンやゴボウ、サトイモなどの野菜と、コンニャク、鶏肉などを一緒に煮込んだもので、古くから正月料理や祝の

また、防災担当の有野主任主事(総務課)から「上毛町防災ハザードマップ」の使い方の説明があり、緊急時に何をしなければいけないかをみんなで考えてみました。子ども達は、マップ上で、自宅の場所に目印をつけ、そこから一番近い避難所がどこにあるかを確認しました。大規模災害に備えて、地域や家族でよく話し合っておくことが大切です。次回までに家族で話し合ったことをワークシートに記入しておくようにと、宿題が出されました。

## 子ども記者講座

探険隊Ⅲでは、子ども一人ひとりが記者になって、4日間の出来事を壁新聞にまとめて発表します。しかし、突然「壁新聞？」と言われても、子どもたちには何をやるのかイメージできません。そこで、「わくわく友枝瓦版」を発行している「友枝新聞発行し隊」の編集長、常慶忠さん(東下)を講師としてお迎えし、子ども記者講座を開講しました。常慶先生は「読みたくなる壁新聞の書き方(常慶忠「流」と題して)、子どもたちに記事の書き方や写真の撮り方のノウハウを伝授していました。また、カメラの実践練習では、子どもたちが人や風景などを自由に撮影しました。撮った写真は、その場で先生にチェックをお願いしましたが子どもたちの予想以上の腕前に、驚きの声が上がっていました。

## チラシづくり

子どもたちが収穫した農産物を直売所に出荷して販売する「子どもマルシェ」を8月10日(水)に開催。たくさんのお客さんにご来場いただけるようにと、子どもマルシェをPRするチラシを手づくりしました。子ども記者講座に続いて、常慶先生から「お客の集まるチラシの作り方」の講義があり、「呼び込みたい対象者を決め、誰に何を売りたいのかを考えてみてください」と、アドバイスをいただきました。

席では欠かせない味として親しまれてきました。しかし、このことを知っている子どもは多くありません。そこで、伝統の味を見つめ直すきっかけになればと、この体験を用意しました。大人たちの心配をよそに、子どもたちは、慣れた手つきで上手に野菜を切っていました。食材を大鍋に移し、味付けをして煮込んだら完成。自分たちで手掛けたにぐいは好評で、何度もお代わりをする子どもがいました。他にも、飯盒炊爨をはじめ、竹茶わん蒸しづくり、かき氷井など、よらんかいの趣向を凝らした調理方法に、子どもたちは興味津々。にぐいをはじめ、自分たちが作ったものに対して好き嫌い言う子どもはいませんでした。



## 緑茶と紅茶

食後、アグリマンの宮崎先生が、緑茶と紅茶の違いについて説明してくれました。元々、同じ葉から作られる二種類の茶。子どもたちは、色や香りの違いなど、不思議そうに眺めています。国内では緑茶の消費が圧倒的に多いのですが、近年の生活スタイルの多様化から、紅茶を嗜好する人も増えているそうです。普段紅茶を口にしない子どもたちは、その珍しさから紅茶を手に取っていました。独特の酸味や渋みから、すぐに渋い顔つきで緑茶に交換していました。子どもたちの紅茶には砂糖が必要なのかもしれません。